調査報告

共同研究　「アジアのデザインに見る文化の性質」

儚さをたたえて在ること――「宮永愛子――海をよむ」をめぐって

所員　神奈川大学国際日本学部教授　松本　和也

何の気なしに目にした、書店からの新刊案内メールに目を奪われる。

もちろん、愛読する書き手や興味深いテーマのものであれば、気になるのがつねではあるけれど、文字通り目を奪われるようにして、画面にひきこまれた。というのも、それが著者名やタイトルといった文字情報ではなく、書影のイメージだったからにほかならない。

その書物は、トルーマン・カポーティ『遠い声、遠い部屋』(新潮社、2023)、村上春樹による新訳である。

もちろん、文学作品としても、新訳としても興味深いにはちがいないけれど、惹かれたのは書影であり、ブック・ジャケットに使われていたのは宮永愛子《suitcase -key-》(2019)なのであった。

宮永愛子(1974～)は現代美術家、所属するミヅマアートギャラリーのホームページでは「日用品をナフタリンでかたどったオブジェや、塩を使ったインスタレーションなど、気配の痕跡を用いて時を視覚化する作品で注目を集める」と紹介されている。2013年、「次代を担う精鋭の日本人アーティストに贈呈」される第1回「日産アートアワード2013」を受賞したほか、2020年には、第70回芸術選奨文部科学大臣新人賞を受賞している。現在の制作拠点である京都に関わっては、2014年に平成25年度京都市芸術新人賞、2020年に第36回京都美術文化賞などを受賞している。

私が宮永愛子作品に強く惹かれていることを自覚する契機となったのは、移動が制限されたコロナ禍に、それゆえ「展覧会による旅行体験」を企図して開催された、「旅と想像／創造 いつかあなたの旅になる」(東京都庭園美術館　2022.9.23～11.27)での展示(風景)であった。

旧朝香宮家自邸である東京都庭園美術館の一室――妃殿下の居間、作り付け戸棚のなかに並べられたナフタリンでかたどられた作品群は、ちょうど目線の高さに展示されていたこともあって、それが視界に入るやいなや、自然と足がそちらに向かったのを覚えている。

新館ギャラリーに移ると、照明が控えられた暗い展示室があった――そこで、床から浮かびあがるようにして静謐に、ささやかに、それでいて確かに光る《suitcase -key-》を目にした。いくつものトランクを木製のパレット上に配置したインスタレーション《手紙》(2013-2019)であった。移動を謳った旅の展示であるにもかかわらず自然と歩みがとまり、作品の中に吸いこまれていきそうな気がした――あるいは、それは想像上の「旅」と呼ぶべき体験だったのかもしれない。

展示室の暗さに慣れてきてからも、《suitcase -key-》に視線を注いだまま、腰をかがめて周回するようにゆったり足を動かし、気づけばいつまでもここにとどまり、見ていられるという気持ちになっていた。

今振り返ってみれば、そこにカタチとしての実在が在りながら、向こうが見透せるほどではないにせよ透明であること、作品内部から白い光を放っているように見えたこと、そうしたところに詩情にちかい魅力を感じたのだと思う。

2023年、春から夏にかけては、実に多くのところで宮永愛子の作品を見る機会に恵まれた。

東京では、森美術館開館20周年記念展「ワールド・クラスルーム:現代アートの国語・算数・理科・社会」(森美術館　2023.4.19～ 9.24)に、《Root of Steps》(2023)が新作として出品された。ナフタリンで作られた作品が収められた大小さまざまな複数のガラスケースが、高さを変えて展示され、そのいずれもが白く透明な作品に当てられた照明によって静かに光をたたえ、面として神秘的な情景(展示風景)であった。常温で気化するナフタリンでつくられた靴は、会期中にも時の進行にともないかたちが変容し、ついにはなくなってしまうという。にもかかわらず、気化したナフタリンはかたちをかえてガラスケースに存在しつづける。儚い実在／実在の儚さ。

2023年6月9日(金)から翌10日(土)にかけて、アジア研究センターの調査として京都・大阪に赴き、近代以降のさまざまな美術作品を実見する機会を得たが、その際の目的の1つが、京都祇園の和菓子屋「鍵善良房」による美術館で開催中の「宮永愛子――海をよむ」(ZENBI-鍵善良房-KAGIZEN ART MUSEUM　2023.6.3～8.27)であった。この展覧会のホームページには、「「変わりながらも存在し続ける世界」を表現しているアーティスト」という宮永愛子の紹介とあわせて、次のような紹介文が掲載されていた。

> 宮永は、「宮永東山窯」を開いた京焼の陶芸家、初代宮永東山の曾孫でもあります。近年、活動の拠点を生まれ育った京都の町に戻した彼女は、陶

《くぼみに眠るそら -仔犬-》(2021)　撮影:福永 一夫

《くぼみに眠る海 -猫-》(2023)　撮影:小川 明郎

房に今も残る古い型にガラスを流し込み、過去と現在を結ぶ作品を制作しています。

以前より、宮永愛子は作品を通じて「時間」を表現してきたアーティストと目されてきたけれど、その「時間」は多く形而上学的なもの-観念的なものであったように思う。ところが、この個展において宮永は、かつての曾祖父の創作の痕跡を流用したガラスの創作物を現在に生みだすことによって、形而下においても「時間」を作品化した-物質化したことになるのだろうか。

そのようにしてつくられた、たとえば《くぼみに眠るそら -仔犬-》(2021)〔ナフタリン、ミクストメディア(東山窯の石膏型を使用)〕や、《くぼみに眠る海 -猫-》(2023)〔ガラス、空気(東山窯の石膏型を使用)〕は、だから一見してそこまではわからないにせよ、「型」という一家の伝統-来歴を担ったガラス(による創作物)——まるみ-あつみのある輪郭に包まれて白みを帯びた透明のボディは、その物質的な外延にとどまらない存在感-物語をたたえている。

とはいえ、そのように感じる要因が、さしあたっては外見や造形に由来するものであろうことは疑いえず、ほかに考えられることはZENBI-鍵善良房-KAGIZEN ART MUSEUMの展示スペースや庭などに配されたことによる化学反応——展示風景だろうか。受付の奥やほんの足下、庭の茂みの一角など思わぬところにひっそりと置かれ、少しの角度のちがいで、じつにさまざまな表情を見せる。

ほかにも2階には、展示スペースにおおきな余白とあわせてたくみに配置された《ひかりのことづけ》(2021)〔ガラス、空気〕が展示され、ガラスが透明であるということの魅力が、やさしい照明とそれをあたたかく照り返すフロアのあわいに漂っていた。そこでは、はりめぐらされた緊張感にも似た、しかしやわらかくもこまやかな空間の分節が感じられ、ここに在りながらここではないどこかにいるような非現実感につつまれもした。

いずれにせよ、作品という物質がそこに在りながらも、そのことに端を発しつつも、その造形-外延にはとどまらない何かが表現されていく宮永愛子作品の現在形。儚さをたたえながら、確かにそこに在ること——そうした魅力が凝縮された個展であった。

個展「宮永愛子——海をよむ」で示された作品群のバリエーションは、「宮永愛子展」(イムラアートギャラリー 2023.7.22〜8.5)や「三代東山展—宮永家の人々—」(思文閣京都本社　2023.9.16〜9.30)においても、それぞれ展開されていた。

前者では、スペースの奥に代表作《waiting for awakening -wall clock-》(2015)が展示されていた。ナフタリンでつくられた時計を透明樹脂に封入した同作には、シールで塞がれた穴が空けられており、その封印が解かれると作品は空気に触れて変容を遂げていくのだという。時空間が閉じこめられた作品であるにもかかわらず、そのすべては見透せる——何も隠してなどいない作品が、それを目にする現在の鑑賞者の過去／未来までをも照らしだす。

後者は、陶芸家である三代宮永東山の新作を中心とした展覧会で、京焼宮永家の一族の軌跡-歴史が、初代、二代東山、長男・甲太郎氏、次女・愛子氏らの作品によって見渡せるものであった。

宮永愛子は、すでに次の個展「宮永愛子　詩を包む」(富山市ガラス美術館　2023.11.3〜2024.1.28)が決まっている。「ガラスの街とやま」のガラス美術館という展示空間において、宮永愛子による作品はどのように映じるのだろう。

＊作品画像の掲載については、ミヅマアートギャラリーにご高配いただきました。この場を借りて、御礼申し上げます。